

# 有明鉱大災害 緊急レポート

有明鉱大災害の起こった日、大牟田市新勝立町の炭住街は五十九年ぶりの大雪の中にあつた。この社宅だけで十一世帯十三人の炭鉱労働者が殺された。十九歳で入ったばかりの青年もいる。奇跡的に生還した藤原さんの生々しい体験を田上勇さんにレポートしてもらった。

## 兄弟の死が

「火は消えていないが、人的被害なし」の報に、不安を残しながら昇坑した南新開から帰宅する。妻が「かなりの人がまだ帰っていないよ、隣りの藤原さんといは三人ともまだいなよ」といふ。思わず、「もう、みんな駄目かも知れんぞ」と口を突いて出た。不安と恐怖の交錯。一喜一憂して待たわびる私たちに最後の



在りし日の長男清正さん(24)右、次男和敏さん(19)



初七日も終わり、花輪も取り片付けられたが「忌中」の文字が痛ましい。



兄弟の遺骨と位牌のまつられた祭壇の前で。藤原さん(右)と田上さん。



420メートル坑道の奥にいた藤原さんは、生死をさまよった様子を怒りをこめて語った。

## 空気管頼り

「自分は、みんなここに来い」と叫んだが、息子二人は俺のいうことを聞いてくれず、係員のいう方に逃げた。呼び返そうと振り返ったが、もう一寸先も見えなかった。地面をはいくははり、手さぐりでエア管を求めてにじり寄り、手に触った。あつた。取り出しコックを探し当てた。着いた上着を頭からかぶりコックを開けた。まだ煙が入ってゐるよつた。スポンを脱ぎコックの根元に巻き

## 奇跡の生還だったが、しかし……

# 息子二人は殺された

## 救出は最後になる。負けずに頑張るぞ

「お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、みんなここに来い」と叫んだが、息子二人は俺のいうことを聞いてくれず、係員のいう方に逃げた。呼び返そうと振り返ったが、もう一寸先も見えなかった。地面をはいくははり、手さぐりでエア管を求めてにじり寄り、手に触った。あつた。取り出しコックを探し当てた。着いた上着を頭からかぶりコックを開けた。まだ煙が入ってゐるよつた。スポンを脱ぎコックの根元に巻き

## 不安と恐怖

「不安と恐怖が入り混じり気が狂いそうである。息をしっかりと持たなければと歯をくいしばった。たなければと歯をくいしばった。何度か死ぬかと思つた。ときどき

「火が消えたら水をいれるぞ。水を入れるなら助からんぞ。弱々しいが奇跡ともいえる生還だ

「不安と恐怖が入り混じり気が狂いそうである。息をしっかりと持たなければと歯をくいしばった。たなければと歯をくいしばった。何度か死ぬかと思つた。ときどき

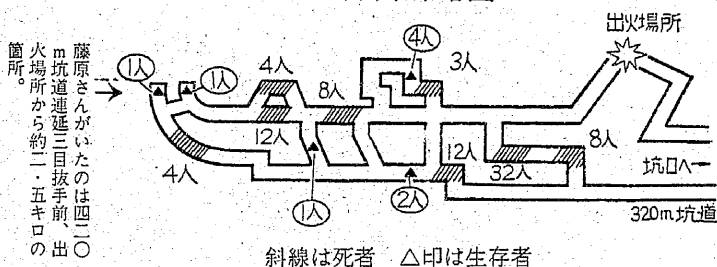
## 人命軽視が

「名前を出さないで下さい。事実を話しますから」といふ。入坑者全員が警察での取り調べに對して事実を述べていると思う。新労組員も本気で事故の恐ろしさを思い起こし取り組もうとしている。

## 人命軽視が

「名前を出さないで下さい。事実を話しますから」といふ。入坑者全員が警察での取り調べに對して事実を述べていると思う。新労組員も本気で事故の恐ろしさを思い起こし取り組もうとしている。

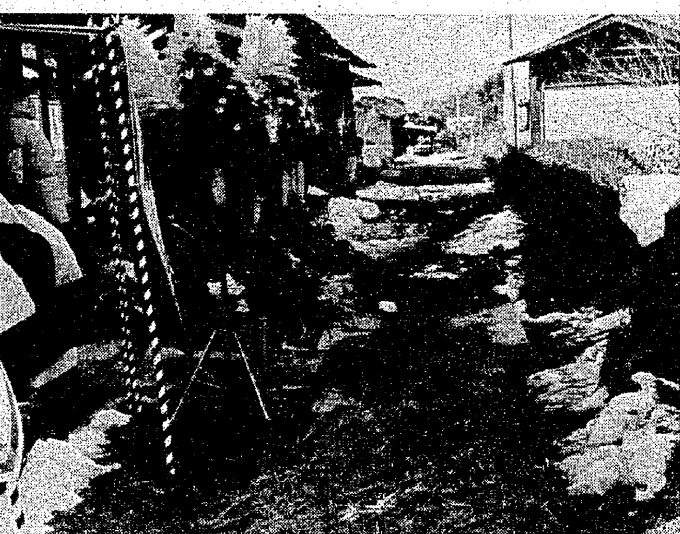
## 災害箇所略図



斜線は死者 △印は生存者

## 長男を発見

「すべつを見るとき、上の息子清正が仰向けに倒れていた。頭に血



災害から1週間経った日も、勝立社宅の玄関前には雪が残っていた。

藤原敏則さんは、下請けの須山建設の組長で新勝立町の富前社宅に住んでいます。沈着な行動で最後の救出者として自分は助かったが、長男の清正さん(二十四歳)と次男の和敏さん(十九歳)の二人を助けた。二十六日に再開した三井石炭・松田社長に怒りを込めて「煙の坑道に行ってみよ」と詰りめ寄った。

レポーターは、十四分會(有明鉱南新開勤務)の田上勇さん(藤原さんと同じ棟に居住)です。